



患者さん図書室「道しるべ」

高橋 眞由美

I. はじめに

島根県立中央病院（以下、当院）では、10年来検討してきた患者図書室を2007年10月にオープンしました。情報があふれる時代に、患者さんやそのご家族に信頼できる医学的情報を提供したいとの思いでつくった図書室です。

愛称は、利用者から募集し、「道しるべ」としました（図1、2）。この患者図書室が利用者の健康の道しるべになるようにとの願いを込めています。



図1 患者さん図書室「道しるべ」



図2 「道しるべ」内の様子

II. 構想からオープンまで

当院の患者図書室の運営主体は図書委員会です。患者図書室の構想はいつからあったのか過去の図書委員会議事録で確認したところ、10年ほど前から検討されていたようですが、この頃はまだ具体的なことは話し合われていなかったようです。

2003年10月に病院機能評価を受審しました。審査官の質問のひとつに「患者図書室はありますか」という問いがあり、計画中である旨回答しています。有志寄贈の一般書を患者図書室用に準備していましたが、当時は感染症委員会が感染について問題にしていたこともあり、進展がなかったようです。

しかし、この病院機能評価がきっかけとなり、開設の機運が高まってきました。図書委員会のたびに議題として取り上げられ、具体的なことが少しずつ決まっていきました。

2006年春には1階外来ホールの一角に患者図書室の設置場所が決定しました。広さは書棚や椅子を置く場所を含めて約20平方メートルです。広い病院の中で場所はいくらかでもあるように思えますが、いろいろな制約や事情があり、場所の選定はたいへん困難でした。実際に場所が決まると、一気に開設準備が進展しました。2007年に入ると、蔵書の内容、現場のレイアウトなどについて図書委員会で話し合いました。春頃からの蔵書の選定と購入に始まり、9月には書棚や椅子などの家具の搬入、10月に入ると書棚に蔵書の配架を行い、10月15日にオープンしました。

Ⅲ. 患者図書室の概要と近況

当院の患者図書室の設置目的、コンセプトについて図書委員会で話し合ってきました。まず、患者さんやそのご家族のための信頼できる医学的情報や、医師から提供された情報を補う情報を提供する場が必要であることを確認しました。また、退院後の生活のための情報を提供することも必要だと考え、網羅的で信頼できる書物からの情報を提供する学びの場としての患者図書室を展開していくことにしました。

運営していく中でコンセプトが曖昧にならないようにするため、図書委員会で患者図書室管理要項を作成しました。すでに患者図書室を設置している他機関の管理要項を参考に作成しました。設置目的、利用の方法、運営、収書方針などについて定めています。

設置場所は、庭に面した窓側の明るい場所であり、両側に6台の書棚を置き、その間にツールや書き物ができるテーブル席を用意しました。老眼鏡、メモ用品、意見箱を置いています。図書室といっても、実際は家具で区切ったオープンスペースのコーナーですので、書棚については本の紛失防止のために、鍵がかかるスチール製の事務用収納棚を利用しています。

患者図書室の日常的な運営は、図書室の司書である私と図書室事務員1名が兼務しています。私達は日中は2階の職員用図書室で業務をしているため、1階にある患者図書室の見回りはホール付近にいる病院ボランティアのメンバーに協力を依頼することにしました。このボランティアのメンバーは患者図書室開設計画中から協力の申し出をされていて、バザーの収益金の一部を患者図書購入のために寄贈くださったりしています。毎日、利用者への案内、図書の整理、利用者の要望・意見の伝達など積極的に活動していただいています。

私たち2人の図書室担当者が行う患者図書室定期業務は、朝8時半の書棚の開錠、日中数回の現場のチェック、17時の施錠、日誌の記入です。

利用者は、多い時には5~6人おられます。狭いスペースですのでこれくらい人がおられると窮屈な感じもします。外来患者数が多い日は患者図書室に立ち寄られる人も多くなります。現在のところコピーサービスも貸し出しも行っていませんので、メモを取っておられる利用者の姿もよく見かけます。

よりよいサービスをしていくためには利用者の声を聞くことが必要ですので、開設当初から現場に意見箱を設置しています。できて嬉しいという声をたくさんいただきます。一方で要望として、蔵書の内容を医学書だけでなく気分転換になるようなものや子どもの本も置いてほしい、土日や時間外も利用したいなど、現在のサービスの見直しについて触れた声も寄せられています。可能なものについては対応を検討しました。その中で、子どもの本については、絵本や漫画は置かない方針ですが、子ども向けに書かれた医学的な書籍や健康管理に関するものであれば蔵書対象とし、書棚の一角を子どもの本のコーナーにして展示を始めました。開設時間については今後の様子をみながら引き続き検討していくことにしました。

Ⅳ. 蔵書と選書

オープン時の蔵書は患者さん向け医学書が86冊、闘病記49冊、健康関連の月刊誌2誌でした。その他、当院医師が地元紙に寄稿している健康情報のコピーのファイルも展示しています。医学書はその後買い足して、オープン後約半年で300冊余りになりました。

蔵書の選定は、同じようなコンセプトで患者図書室を提供する某大学病院から蔵書リストをいただき参考にしました。それでも各ジャンルの本を十分に揃えることができなかつたため、インターネット上の情報、書店からの情報を参考にして購入しました。当院の患者図書室の蔵書は何でもいいというわけではなく、信頼できる医学的情報に限定していますので選定にはたいへん時間と手間がかかります。選定の際には、

内容的に該当する部署の医師、看護師、検査技師らに手分けして現物をチェックしてもらい、不適切と判断されたものは採用しないことにしています。その結果、購入はしたものの患者図書室に配置していない書籍もあります。

また蔵書が増えてくると、ジャンル間で多い分野、少ない分野ができ、アンバランスが気になってきました。出版点数が少ない分野もありますが、利用者のニーズを満たす蔵書の構築もひとつの課題です。

提供する図書はコンセプトそのものといえますので、引き続き図書の選択には神経をつかうことになりそうです。

V. おわりに

患者図書室サービスは、病院サービスのひとつとしてだんだんウエイトが大きくなってきており、病院機能評価の中でも確認項目のひとつとなっています。

当院では今後、予算も継続して計上される見通しですので、利用者の要望を把握して、より有効なサービスを提供していくことが求められてきます。

また、今後、他部署との連携も運営にかかわってくると考えられます。例えば当院には「がんサロン」がありますが、場所の都合でサロン利用者向けの資料を配置しておくことができず、ぜひ患者図書室のスペースに資料を置かせてほしいという要望もあります。このようなことから考えても、今後いろいろな部門との連携・調整が必要になってきて、それに伴って蔵書内容や運営も変化していくのではないかと考えています。

利用者の声を参考にしながら、より喜ばれる患者図書室を展開していきたいと思っています。